教養講座 地元学を考える

第百五十三回「地元学を考える」（二〇一六年九月二十四日開催）

「県の北部に県庁ができたわけ」

講師　ややまひろし さん

今回のテーマには大変興味があり、なんとなく知っているつもりで「?」印だった事が「なるほど！」が一杯となり楽しいひとときでした。福島市の中での地名が町（まち）であったり町（ちょう）であったりする区別の意味がわかり、自分の住んでいる地区に当てはめて考え地区の歴史研究会（私も会員）で地図を見ながら、いろいろ知識を広めました。皆さんも自分の住んでいる地区について興味を持つことも、いいかな？と思います。

また、時々県庁が郡山に持って行かれるような話題が出ますが、福島は養蚕が盛んだったので、東北に一番先に日本銀行支店が設立されたのだと思っていました。福島市に県庁がある理由は、福島が城下町だったからです。福島の城は、上杉氏が福島城をを離れてからは、幕領（幕府の直轄の領地）となりました。板倉氏が福島に入ってからは明治維新まで百六十有余年続きました。それ以前は殿様がコロコロ変わっていたようです。そのため福島市民は文化の変化にはあまり動じないようです。

郡山には城下町としての歴史がないので、県庁所在地としては適していないそうです。ヨカッタデスネ。

福島市には、あまり知られていない歴史がたくさんあります。古くは安寿と厨子王の伝説や、明治維新直前の戊辰戦争時、官軍の一員だった世良修造の供養塔など・・・。

ややまひろし氏のお話を聞くたびに我が故郷が大きな歴史の中に関わっている楽しみが広がってくるように感じます。来年の夏の「地元学」では、どんなお話が聞けるかが楽しみです。（高田英子）

第百五十三回の感想は高田さんに寄稿していただきました。ありがとうございました。

「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明展」

100年の時を越えて地元で開催！（前編）

七月の会報でご紹介した「アンデス文明展」開催の様子を同村在住の佐原さんがご紹介します。

「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明展」は八月六日にオープニングセレモニーを行い、シャロームの大竹代表をはじめ関係者の方々が集まり、展示会の成功を祈りました。故与吉さんの孫でもあり日本マチュピチュ協会長でもある野内良郎さんが、「祖父の偉大な功績を多くの人に伝えるきっかけができたことが本当に嬉しい」と挨拶されました。そのおかげでしょうか、八月七日から二十八日までの開催期間中、約三〇〇〇人の方々が来場してくださり、大成功となりました。

会場には、故与吉さんが現地の鉄道に携わった時に使用した、手作りのスパナやハンマー、愛用品や家族にあてたスペイン語の手紙、岡山県のBIEN中南米美術館の協力でペルーの古代遺跡から発掘された古代アンデス文明の土器や織物、ミイラなどが展示されました。同じ会場内にはペルーの民芸品などの販売もあり、初日から大人気。開催期間中、民芸品の購入だけに何度も足を運んでくださる方もいらっしゃいました。

▲オープニングセレモニー。主催者のみなさんとシャロームの面々。

また、会場に設置された縦三㍍、横十㍍のマチュピチュ遺跡の巨大写真の前では、アンデスの民族衣装を着用して記念撮影する方も多く、実際にマチュピチュ遺跡を背にして撮影したかのように映り、大変喜ばれていました。さらに、故与吉さんの長男であり野内良郎さんの父でもあるセサルさんのアコーディオンによるペルー音楽の演奏も大好評で、会場内はとてもアットホームな雰囲気でした。

この展示会を成功することができたのは、主催者のご尽力はもちろんの事、その他にも多くの方々の支援や協力があったからだと思います。特に開催中の運営をバックアップしたのが、ボランティアの皆さんでした。

▼▼十一月の会報に続く（佐原佐百合）

▲マチュピチュ観光気分を味わえる⁉大人気だった撮影スポット。